

丸山欣哉先生を偲んで

阿部 恒之（東北大学大学院文学研究科心理学研究室）

丸山欣哉先生は2019年11月22日に88歳でご逝去されました。夕食を召し上がった後、床について、そのまま静かに息を引き取られたとのことです。老衰ということですから、天寿を全うされた大往生です。

丸山先生は1931年、宮城県塩竈市にお生まれになりました。1950年仙台第一高校をご卒業して東北大学理学部に入学され、3年次から文学部心理学専攻に編入学されました。最近よく文理融合という言葉を使いますが、丸山先生の経歴は、すでにして文理融合でした。

1954年に東北大学文学部心理学専攻をご卒業になった後は、そのまま大学院に進学され、修士課程、博士課程を経て、1959年には心理学講座の助手になられました。1962年には福島県立医科大学の講師となられて、1964年には、文学博士となられました。当時としては異例の早さでの学位です。学位論文の題目は「異系感性相互作用の研究——視感覚と聴感覚との相互作用に関する実験的検討を中心として——」でした。現在盛んに研究されている多感覚相互作用の先駆けとなる研究です。また、この時代に感性という用語が用いられていることにも驚きます。

学位取得の翌年には福島県立医科大学の助教授となり、1969年に助教授として東北大学文学部心理学講座にお戻りになりました。1975年に教授に昇任され、1978年からは、主任教授として、1995年までの長きに亘って東北大学文学部心理学研究室の「家長」の任をお務めになりました。

ご退官後は直ちに名誉教授となられると同時に、宮城学院女子大学教授として着任され、2002年まで勤務されました。その後は悠々自適の日々を送られました。ご長男ご夫妻とともに、愛妻・直美様の介護に注力されました。このころ、事情を知らずに丸山先生を呼び出し、ご馳走になったことが数回ありましたが、今思うと汗顔の至りです。ご自身が老人施設に移られた後も、時折、なじみのお寿司屋さんで一杯やるためタクシーを飛ばして「脱走」するなど、丸山先生らしく過ごされていたと伺っています。

丸山先生を偲ぶにあたって、まずは研究面から振り返らせていただきます。

「基礎と応用の二本立て」…これは丸山先生の口癖です。丸山節とも言うべき丸山先生の数々の「格言」のうちの一つです。そしてまた、「基礎あつての応用」ということも繰り返し口にされていました。東北大学は開学以来、「研究第一主義」の伝統、「実学尊重」の精神、「門戸開放」の理念を掲げてきたと謳っています。ここに挙げた丸山先生の格言は、「研究第一主義」と「実学尊重」を丸山先生流に咀嚼したものだと思います。東北大学金属材料研究所初代所長・東北大学第6代総長の本多光太郎教授は、「産業は学問の道場である」という言葉を残していますが、これに相通するものを感じます。

多感覚相互作用の研究で若くして博士になったように、丸山先生は、早い段階で基礎の土台を堅牢に固めました。そして、次第に視線は実社会に向けられました。とりわけ当時大きな問題となっていた交通事故の抑制、すなわち、交通安全に関して多大なるご尽力をされ、交通心理学の分野で多大な功績を残されました。特に、事故多発傾向者を検出して安全運転教育に誘う、「速度見越し反応検査」は、自動車事故対策センター



丸山欣哉 先生

などで広く使われてきました。検査対象者は、1.2mの距離から、横94cm×縦50cmの検査版の上を光点が移動するのを観察します。2/3程度移動したところで、この光点は黒い遮蔽物の下にもぐります。光点が遮蔽物を通り過ぎて再出現すると思ったタイミングでボタン押し反応を求めると、事故多発傾向者は再出現タイミングを早く見積もった反応をします。これを「尚早反応」と名付けました。但し、「見積もった」という表現は不適切です。尚早反応者は、口頭での反応では反応時間が遅延し、自らの反応時間を事後に再現して見せると「早すぎる」と評価しました。つまり、尚早反応とは、ボタンを押すという動作の尚早性に特徴があり、これは「動作優位」あるいは「動作本位」と称されています。

丸山先生の交通心理学に関する研究は、『適性・事故・運転の心理学』（丸山欣哉編著、1995）にまとめられていますが、この書籍において、小松紘先生は丸山先生の交通心理学研究を起承転結の四相にまとめて解説されています（pp.214-215）。それによれば「起」は、仙北鉄道（現・宮城交通）の依頼を契機とする運転適性検査の研究開始。「承」は運転行動録画装置の開発などによる研究の進展。「転」は適性・運転ぶり・事故経験の関連性への洞察の深化。そして「結」は、運転適性管理のための助言に知恵を絞ったことです。指導ではなく助言。手を引いて導くのではなく、本人が歩くのを支える。これが丸山交通心理学であると小松先生は看破されています。

丸山先生は、交通不安全感検査（Traffic Unsafty Personality Inventory : TUPI）も開発されています。これらの功績により、1991年に運輸大臣から交通文化賞を受賞されました。授賞の理由には、「…この適性検査器（速度見越反応測定器）は、自動車事故対策センターのみならず警察関係、損害保険会社等広く使用され、自動車事故の防止に多大な貢献をした…」とあります（畑山、1995、『文化』58巻）。なお、2011年には瑞宝中綬章を、ご逝去に際しては死亡叙位で正四位を授けられています。「多少なりとも世のため人のため」という丸山先生がよく口にされていた志を、様々な形で認めていただき、誇らしく、ありがたく思います。

この他、視覚系の時間応答に関する研究によって、外部環境刺激に応答する仕組みを心理物理学的に明らかにされたり、英国で盛んになり始めた顔の知覚研究に、日本でいち早く着手されたりと、「基礎と応用の二本立て」を着実に実行されました。

次に、教育面においては、その洒落な語り口、そして消すのがもったいないほどの見事な板書のイラストを真っ先に思い出します。

授業がとにかく楽しい。90分のショーを観覧するような授業でした。板書については、さらさらと描いたラットの後ろ姿をいまだに覚えています。ラットのお尻の立体感、垂れた尻尾の自然さ。その向こうにちょこっと見える鼻先と髭、耳。白チョークの単純な線で、今にもジャンプしそうなラットが現れました。咄嗟に、雪舟の鼠の絵の伝説を思い出したほどです。

特殊実験という卒論のリハーサル的な科目、そして本番の卒論では、丸山先生のご指導をいただきました。但し、正直言って、ご指導らしい指導は受けたことがありません。ほとんどが院生任せでした。今になって思えば、学生の自主性を伸ばし、指導する側の院生の成長も促す教育方針であったと振り返ることができません。今の私と学生が共に過ごす時間に比べると、丸山先生とお話した時間は、何倍になるかわかりません。直接、研究面での指導をいただくことはなくとも、丸山先生の薫陶を受けたという実感が湧くとともに、わが身を反省せざるを得ません。学生には教えない。しかし、付き合いにはとことん時間をかける。これが丸山先生流の教育でした。

ここまで、研究と教育の面についてお話申し上げましたが、丸山先生を偲ぶにあたって、お人柄を振り返ることも、いや、それこそが重要だと思います。ここまでで、すでにそのお人柄が滲み出ているとは思いますが、ここからはお人柄についてお話ししたいと思います。

東北大学の研究室同窓生によって編まれた丸山先生の追悼文集は、『喝・欣・仙』という書名です。丸山先生の「カーッ」と発声してパシッと肩をたたき癖を「喝」。欣喜雀躍の多動的明朗性を、お名前から一字拝借した「欣」。神がかった洞察力を「仙」で表しました。



丸山先生の追悼録『喝・欣・仙』

偉人の追悼録ですから、賛辞で埋められるのが相場だと思います。しかし、『喝・欣・仙』には、丸山先生のおふざけで被った災難への苦情が多々寄せられています。但しその苦情は、丸山先生への愛着で裏付けられた思い出です。卒業して何年たっても、同窓生が集うと丸山先生の話になったものです。その時は、ある年齢層より上の人集まりで不健康自慢が始まるように、自分の被害の重篤さを競うのが通例です。『喝・欣・仙』は、そんな追悼録になりました。

完成した追悼録を読むと、丸山先生にはおふざけのレパトリーがあって、そのレパトリーを、人を変え、時代を超えて展開されていたことがうかがえます。そしておふざけの中に、時折「格言」が混じり、その意味を長く考えさせられた経験者が多数います。普段はからかってばかりなのに、学生が失敗した時は叱ったりからかったりせず、しみじみと、「お前は大物だなあ」と一言つぶやいて看過してくださった思い出は、多くの人に共有されているはず。何かの事情で落ち込んでいると、それを見逃さず、栄養をつけてやると言っただけの夜に連れ出されます。その時は、いつも通りのおふざけをしながらも、親身に、じっくり話を聞いてくださいます。「お前はXXになる」と予言され、何十年もたってから、丸山先生の予言通りになったというような、丸山先生の神通力(?)に関する逸話もいくつかありました。そういえば、じっと見つめられると、心の中まで見透かされたような気分になったものです。

冒頭の丸山先生のお写真は、ご家族からお借りした遺影です。このお顔は、親身に話を聞いてくださるときの、あるいは、未来を見通す神通力を発揮されるとき、あるいは、「フン、今日は海に行きます！」と宣言される直前に一瞬沈黙した、あのお顔です。

丸山先生を語るほどに思い出はあふれてきます。心よりご冥福をお祈りいたします。